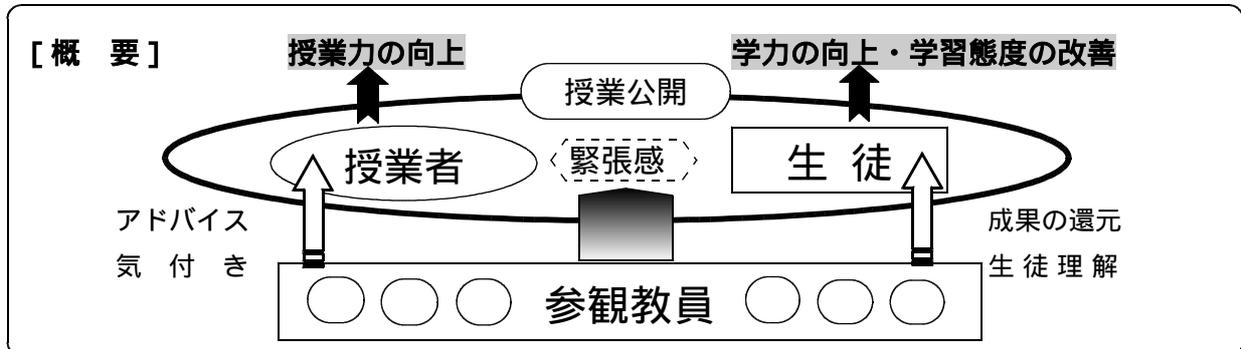


7 「教員間の授業公開」の活性化を図り、授業力の向上をめざす



授業力の向上を図る研修を充実させるため、「教員間の授業公開」を推進する

近年、学校に対する社会の期待や要求はますます大きくなり、多様化している。また、学校を取り巻く環境は目まぐるしく変化しており、課題も多い。こうした状況に対応するために、進路指導や特別活動の充実などが図られているが、学校における教育活動の中心は、いうまでもなく授業であり、その充実なくして、学校全体の活性化はあり得ない。

とりわけ、生徒間の学習意欲や学力における格差が拡大傾向にある場合には、従来の指導方法を見直すとともに、指導技術の一層の向上、より綿密な教材研究を行うことなどが必要となる。しかし、日々の業務から、授業改善を図るための研修時間が確保しにくいことも事実である。



参観者も机間から学習活動を観察

そこで、教員が相互に授業を見せ合う「授業公開」を日常的に行うことにより、授業時間がそのまま参観者の研修時間となるようにして、授業改善及び授業力の向上を図るための研修を、効率的に実現しようと考えた。

「指導案なし・協議会なし・主体的な公開宣言」により、特別ではない日常的な取組とする

授業を公開することに対しては、多くの教員が少なからず抵抗を感じるものである。その抵抗感の中には、単なる気恥ずかしさも含まれるが、授業前の準備、特に、学習指導案を作成することへの負担感がある。

そこで、授業公開の回数を増やすことを優先し、学習指導案は特に用意しなくてよいこととした。こうした場合、授業者がどのようなねらいで授業を組み立てているのかが分かりにくいというマイナス面もある。しかし、一方で、参観者は、生徒と全く同じ立場で授業を受けることになるため、授業者に対し、生徒と同じ目線で率直なアドバイスを行えるという面もある。また、生徒のつまずきやすい指導方法を、参観者自らが実際に体験する機会が増えることにより、参観者の授業改善にも役立つ。

次に、その実施方法についてであるが、授業の内容によっては、公開しても研修効果が期待できないものもあるため、「授業公開 WEEK」といっ

た、実施期間を限定する方法はとらずに、授業者が、職員室の黒板に、実施科目・時間・クラス等を記入して自主的に授業公開を宣言し、都合がつく者が参観するというスタイルをとることにした。

さらに、授業後の意見交換等については、年間を通して日常的に授業公開を行うため、全ての授業に対して、参観者が全員参加する協議会を設けることは難しい。そこで、参観者それぞれが、授業者に気付きを伝えることで、それに代えている。

こうした工夫によって、積極的かつ長期的に授業公開に取り組める環境が整い、この取組を始めてから3年目を迎えたが、ほぼ「普通のこと」として定着し、年間の延べ公開授業数は、常勤者20名で、一昨年は106回、昨年は171回を数えた。

授業公開による「緊張感」が、学校・教員・生徒に変化をもたらす

では、この研修によって、どのような成果が得られたのであろうか。まず、教員の意識については、下表に示すように、実施前に比べて、授業公開への積極的な意識が高まっている。5段階の数値が上昇した者が20人中12人、下降した者は1人であった。実施前には躊躇する気持ちがあったが、実際に体験してみると、一定の意義を見出すことができたということであろう。ただし、継続への意識の数値が下がっている者もあり、多少の負担感や義務感が残っていることは否めない。

また、授業者の口からよく出る言葉が「緊張感」である。見られているという意識から、「教材研究をより綿密にするようになった」「説明の仕方をよく吟味する癖がついた」といった効果が現れている。「緊張感」ということと言えば、副次的なものであるが、生徒の授業態度の改善、教室の美化と

「授業公開」による授業者の意識の変化

	肯定的.....否定的					
	5	4	3	2	1	平均
実施前の意識	2	8	6	4		3.4
実施後の意識	7	9	3		1	4.1
継続への意識	5	9	5		1	3.9

(常勤のみ20人中の人数、教頭を含む)

いった効果もある。生徒に対しては、校長から、授業改善のためであって監視するためではないとの説明がなされているが、複数の教員が参観する中で、生徒も気を抜くことはできないようである。

さらに、参観者からは、生徒理解が進んだという声も多く聞かれる。自分の授業時とは異なる生徒の姿を見て、一人ひとりのよさを生かすための授業の組み立てを考えるようになったという効果も報告されている。



教員も生徒になった気分で授業を参観

より効果的・効率的な研修体制を構築するための工夫を考える

一方、この研修方法にも、様々な問題点や改善すべき点があることも事実である。教員間の授業公開が「普通のこと」として日常的になればなるほど、1回の公開授業に対する注目度が低くなり、参観者の減少、顔ぶれの固定化といった傾向がみられはじめた。いわゆるマンネリ化を脱するための方策の検討が今後の課題である。

また、研修を実施しやすくするため、授業後の研究協議会は特に設定していないが、見せっぱなし、見っぱなし、という状況に陥りがちである。このことについては、授業者が、資料提示の仕方や発問の工夫など、授業で見てもらいたいポイントを予め示すとともに、参観者も、その点については確実に意見を返すなどの改善が必要である。また、参観者も自らの授業の現状に照らし、課題意識をもって授業参観に臨むことが必要である。さらに、年に数回でも、幾つかの授業を事例とした全体研修会が開催できれば、一層効果的な研修体制が構築できるものと考えられる。